

# 紙芝居 いせさき・多喜二奪還事件

<p>第1場面</p>		<p>1931(昭和6)年9月6日、上野発9時25分発307号前橋行きに多喜二達講師一行は揃って乗りこみました。前橋経由で伊勢崎に向かいましたが、深谷駅から列車に乗り込んだ菊池敏清と菊池盛男に説得され、本庄駅で降り、そこにいた特高を振り切り、ハイヤーで茂呂村(現伊勢崎市)に向かいました。利根川を越えると伊勢崎です。その時、目に入ったのは、美しい赤城山だったでしょう。</p>	<p>第6場面</p>		<p>講師と主催グループの多くは5時頃、菊池敏清宅で検束され、伊勢崎警察署仮庁舎に移送されました。文芸講演会会場では、残った主催者グループが代理弁士で講演会を決行しました。当時小2だった小林(菊池)邦作の長男小林進さんは番頭さんに連れられ、講演会会場にいました。官憲の横暴に総立ちになった聴衆で前が見えなくなったそうです。13人の代理弁士は、全員が「弁士中止」でした。</p>
<p>第2場面</p>		<p>当時、プロレタリア文学はナップを中心に全盛期を迎えつつありました。『文芸戦線』から分かれ、ナップから発刊された文芸誌の『戦旗』には多喜二の「一九二八年三月十五日」や「蟹工船」が載り、プロレタリア文学の中軸となりました。同じ頃、群馬県では『群馬戦線』が発行され、対抗する形で『上毛大衆』が発行されましたが、県下に700部の定期読者を持つようになりました。</p>	<p>第7場面</p>		<p>検束を逃れた菊池盛男は共栄館で事態を訴え、不当な検束から多喜二達を奪還するため、警察署に聴衆の一部と向かいました。6時台と推測されます。緊急にのぼり旗も届けられ、床を踏み鳴らしての抗議に、木造の仮庁舎は揺れたことでしょう。署内から警官が撤退し、署の内外では革命歌が響きました。多喜二も「床をドンドンと踏みならして応援した。」と改作「飴玉闘争」に書いています。</p>
<p>第3場面</p>	 <p><b>小林(菊池)邦作</b> 菊池敏清</p> <p>1899年～1986年 佐波郡茂呂村に生まれ 小林家に婿養子、東京高等蚕糸学校へ、建設者同盟へ加入 群馬青年共産党事件に連座 社会民衆党系『上毛大衆』主筆 32年9・22事件で激しい拷問 終戦直後、治安維持法廃止に尽力、長野で共産党再建、晩年には『徹兵志士』の研究</p> <p>1909年～1994年 佐波郡茂呂村に生まれ 旧制浦和高校から東京帝国大学文科へ、大学2年でナップの会員として入党 作家同盟群馬県支部を準備 32年2月反建國祭闘争指導 戦中に麻痺で農地解放戦後、共産党茂呂細胞結成</p>	<p>『上毛大衆』主筆の小林(菊池)邦作は、東京高等蚕糸の学生時代の1922年頃から社会運動を始め、群馬青年共産党事件にも関わりました。その後、日本労農党・社会民衆党の伊勢崎支部の確立・強化に努め、約60名の支部員を擁しました。一方菊池敏清は旧制浦和高校から東京帝大に進みながらも、故郷に戻り『戦旗』支局、作家同盟群馬県支部確立に奮闘しました。最高時150部でした。</p>	<p>第8場面</p>	 <p>「ハラツ岡様の作舎」(伊勢崎市支局) 「丸太で固めた壁のまわり所」(庫座二寸あまりの丸太の格子で伝馬町の犬平をしのげる通り)(村山知義)</p> <p>民衆と警察の交渉</p> <p>「東京からきた講師一行は、保護室に閉められてつくした。」(小林邦作) 「多喜二は丸太を叩き、床を踏み鳴らし、おびえる中野重治や私が、到底多喜二には及ばない。」多喜二は一刻も眠っていない。(村山知義)</p> <p>満杯になる5房あった</p>	<p>対峙状態の中、民衆側も警察側も応援を呼びました。民衆側は統一したばかりの全国労農大衆党や活動を始めた全農全国会議派に助けを求めました。終わった講演会からも多数の人が駆けつけたでしょう。その後、東京朝日新聞も報道した「大乱闘」の状態になりました。午後11時頃でした。その後、民衆側・警察側の代表で交渉がもたれ、公開しないことを条件に全員の釈放が合意されました。</p>
<p>第4場面</p>		<p>作家同盟から小林多喜二と中野重治、演劇同盟から村山知義が来県し、村山は左翼劇場のため3、4名(女優は三好久子・清洲すみ子)を連れてきました。菊池敏清の回想では葉書一枚の要請でナップ作家が派遣された訳ですが、この講師派遣は「ナップ移動隊」だった可能性があります。また群馬の伊藤信吉が機関誌『ナップ』の編集にあたり、編集長中野にメッセージを託しました。</p>	<p>第9場面</p>		<p>午前2時頃に事態は收拾され、多喜二たちは5時頃本庄駅に送られました。警察署の近くで労働運動のセンターとなっていた斉藤力宅では堤源寿と福田正勝が見送りました。二人は翌年1月に非合法の共産党に入り、全協オルグ泉吉治とともに群馬県委員会を再建しました。多喜二が入党したのは、事件直後の10月でした。多喜二の話を聞いた方が多くが戦後、多喜二の遺志を継ぎました。</p>
<p>第5場面</p>		<p>午後1時頃茂呂村の菊池敏清宅に着いた一行は、2時頃からの茶話会で話しました。多喜二の題は「台所と文学」でした。30人近くが話を聞いたようですが、20人近くの人の名前が残されています。近くの菊池盛男宅に移り、早い夕食を取った時に、末っ子で当時小3の正さんは、多喜二に頭を撫でられ、将来のことを聞かれたそうです。茗荷の味噌汁を準備したはる子さんも多喜二と話しました。</p>	<p>第10場面</p>	<p><b>多喜二奪還事件より79年目</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>事件は報道されていた…『上毛新聞』、『東京朝日新聞』、『読売新聞』、『社会運動通信』</li> <li>官憲側の資料…『社会運動情勢』(裁判所)</li> <li>応援側の資料…『須永好日記』(月8日)</li> <li>派遣側の資料…『機関誌』ナップ10月号編集後記</li> <li>回想(1960年以降)を活かす方法を探っていく</li> <li>集团的回想・1967年菊池邦作の論文(『随筆 楠』所収) 個人的回想</li> <li>派遣側・村山知義、伊藤信吉</li> <li>主催側・菊池邦作、菊池敏清、菊池盛男、吉田庄蔵、沢尻広吉、弥助寺横三、岡田宝司、小暮はる子</li> <li>応援側・遠藤可彌、堤源寿、坂内一登司、佐田一郎(富沢実、福田正勝)</li> <li>家族…小林進(小2)、菊池正(小3)</li> <li>多喜二と奪還事件</li> <li>事件の受容があるのか? 「飴玉闘争」改作の意義</li> </ul>	<p>「公開しない」という約束が長く守られ、初めて事件当事者が事件を公表したのは1960年でした。事件より29年後でした。地元『上毛新聞』以外の事件報道を発掘したのは、一昨年の第1回伊勢崎・多喜二祭でした。この間発掘された第一次資料や新聞報道も分析して、村山知義の貴重な回想も含め、関係者の回想を生かした事件の再構成や究明を行っていきたいと考えています。(2010・2・23)</p>